

ユング心理学の原型

プロトタイプ

神秘体験・心霊現象・心霊主義

渡 辺 学

ユングの思想の問題を考えようとすると、彼の生育歴に類する初期の体験の世界を無視することはできないであろう。なぜなら、それが彼のものの見方や世界観に大きな影響を与えていることを、だれしも否定できないからである。実際、青年期までのユングの体験と思索の豊かさには、驚くべきものがある。われわれが本論で追求しなければならないことは、少年期から青年期のユングの体験から思想形成にいたる道筋を、その解釈の観点から明らかにすることである。そしてその際、神秘体験と心霊現象を導きの糸としたい。なぜなら、それこそは、少年時代から晩年にいたるまで、顕在的であれ潜在的であれ、彼を魅了してきたといえるからである。その裏付けのために、彼の神秘体験の問題と「ツォーフィングア講演集」をとりあげ、いままであまり論じられることのなかった、ユングの初期の思想を浮き彫りにしたい。

I 少年期の体験世界と神秘体験の問題

C・G・ユングは、一八七五年に父ヨハン・パウル・アヒレス・ユングと母エミリー・ユング・ブライスヴェルクとの間に長男として生まれ、思春期から青年時代にかけて、十九世紀末の時代状況の中で育った。父はヘブライ学者として嘱望されていたが、平凡な改革派の聖職者となり、教区牧師を務めた。母方の家系もまた、その父をはじめとして聖職者を輩出していた。とりわけ、母方の祖父、ザムエル・ブライスヴェルクは、バーゼルの司教をした人物であった。彼には透視力などの超感覚的知覚があり、いつも霊に取り囲まれていると感じて、霊とよく会話を交わしたといわれている。実際、ユング自身を含めて、彼の家系には、霊的能力をもった人々が多く、さまざまな逸話が伝えられている。こうして、彼は、キリスト教の聖職者

の家庭に生まれ育ったというだけでなく、このような心霊術的な雰囲気²が広まっていた世紀末の状況の中で育ったのであった。

ユングの少年期を特徴づけているのは強い内向性であり、孤独と内省であつた。むしろ、内省ということには、豊富な想像活動が含まれており、むしろ、両者は不可分といつてよいであろう。彼は、このような環境の中で豊かな想像力を培つていった。

ユングの生涯持ちつづけた信条のひとつに、「体験主義」があると思われる。彼の「経験論」といわれることがあるが、これはむしろ、心理学的に言えば、ひとは体験していないことを理解することはできないという彼の主張と軌を一にしているのであり、学問上の経験論というよりも、むしろ信条上での「経験論」、つまり、体験を重んじる立場であると考えられる。彼はアメリカやアフリカやインドなどを訪れ、たとえばアメリカのブエブロ・インディアンと接触したりしているが、これは、実際に、身をもつて異文化の人々との触れ合うことで、異文化を体験的に理解したいという、彼の願いの現われであつたのである。ユングは、体験を重んじる態度によつて、自らの視野を大きく拡大していったのであつた。また、彼の体験の概念はきわめて広く、その中には、夢や空想、神秘体験なども含まれていた。実際、直接体験を志向する彼の態度は、すでにこの時期に見られたようである。

ユングは体験知を信仰の上に置く。晩年に行なわれた、B B

Cのジョン・フリーマンとの有名なインタビューの中で、あなたはいま神を信じていますかと問われて、彼は以下のように述べている。「今ですか。お答えしにくいですね。私は知っているのです。私には信ずる必要はありません。私は知っているのですから。」³この発言は大きな反響を呼び起こした。それに対して、彼は、この場合の神とは、具体的には自我に対して現われる「上位的な意志」をさしているものであり、そのような体験的現実のことを「万人の同意」において「神」と呼ぶのであると説明している。それが一般的な神観念に一致しようがしまいが、いずれにしても、ユングにおいては、神は一種の強制としてひとに対して厳然とした現実として現われるものと考えられている。

ユングは十九才のときに、エラスムスの著作の中に、「呼ばうと呼ぶまいと神は臨在する。Vocatus atque non vocatus Deus aderit.」という章句を見出し、大いに感銘を受けた。そして、自らの蔵書票にその章句を書き込んだだけではなく、後年、キュスナハトに建てた自らの家の戸口にそのことばを刻んだのであつた。彼は、自分がそのことばを選んだのは、あたかも自分がよりすぐれた可能性を目前にしているかのように、いつも不安定な感覚を覚えていたからであると述べている。⁴

そのような「神」を体験するという意味で、確かにユングは体験に恵まれていた。たとえば、天空の黄金の玉座に座した神が、おびただしい排便でパゼルの大聖堂を木々端微塵に打ち砕くというヴィジョンがそれである。⁵彼はそのヴィジョンを思

い浮かべることがすさまじい瀆神行為になると思ひ、何日も抵抗しつづけたのであるが、ついには、自らの主体性を放棄して、神の御手に自らを委ね、純粹な受動性のうちにその思いを抱くことと自身が神の御旨であると感じて、ヴィジョンが浮かぶままにしたのであつた。そのようにしたときに、彼はかえつて神の臨在と思寵を感じた。そして、「神の臨在」が既存の社会制度としての伝統宗教を超えたものであるという確信をもつたのである。

後年のユングの見方からいへば、神は存在論的な意味で存在するといふよりも、むしろ、個人の心に対してまさしく現に働きかける現実的なものとして与えられている——あるいは与えられる可能性をもっている——というべきであらう。彼は、「働きかけるものは現実的である。Was, das wirkt, ist wirklich」と述べている⁽⁶⁾。そして、実際、この「個人の心にとつて現実的なこと」、後のユングの用語でいへば、「心的現実」が、その後も一貫して、彼にとつて有意味な地平をなしている⁽⁷⁾。

このように、非日常的な経験や、神の直接経験をしていたユングが、心霊現象や超心理現象に対して関心を抱き、それらに傾倒していったとしても不思議ではないであらう。ある資料によれば、彼はすでに一八八五年、つまり十才のころから、当時四才の幼い従姉妹を霊媒に仕立てて、テーブル・ターニングやその他を内容とする交霊会を開いており、そのような交霊会は、一八九九年まで十四年間もつづいたといわれている⁽⁸⁾。この話がどれだけ信頼に値するかはともかく、彼が心霊現象に

かへのめり込んでいたかが、この逸話からうかがえよう。

ユングは、心霊現象や超心理現象からどのようなことを学びとり、どのような確信をもつたのであらうか。その問題は、きわめて興味深いといわなければならない。われわれがその問題に答えるために欠かすことのできない資料が、近年出版された。彼の大学生時代の講演集がそれである。次に、いまだ研究者の手が付けられていない、この資料に基づいて、ユングの心霊現象や超心理現象に対する見解が検討されなければならない。

II 大学生時代の思想——心霊主義への傾倒

ユングはバーゼル大学に入学した年の五月十八日に、ユングは学生友愛団体、ツォーフィングアのバーゼル支部に加入する⁽⁹⁾。彼は、最初の三学期間は沈黙を守っていたが、その後、順次ツォーフィングアの集会の主導権を握っていたが、その後、順次フィンギアにいかにか熱を入れたかわつていたかは、その集会で数回の講演をしたこと、また、一八九七年から九八年かけての冬学期には、バーゼル支部の議長に就任していたことから明らかであらう⁽¹⁰⁾。

ツォーフィングアでの講演内容からみると、ユングの関心は、科学論、人間論、心理学論、宗教論などの多方面に向かつており、多彩な興味と意気の高さを示している。これらには、成熟期の彼の関心と多くの共通点があるといえよう。

これらの講演の中でも、とりわけわれわれの興味を引くのは、

いうまでもなく、一八九七年五月、二十二才のときに講演として発表された「心理学に関する若干の考察」と題された、若きユングの心理学論であろう。われわれはこの講演によって、彼の思想的な基盤に対して新たな目を開かれるのである。

まず第一に興味深いのは、その講演の構成である。それは序論、合理心理学、経験心理学、結論の四つの部分から成っている。合理心理学と経験心理学との区別は、むしろ、近代自然科学の区分ではなく、クリスチャン・ヴォルフ以来の哲学の伝統に由来するものであり、われわれはそのような区分をカントの形而上学講義の中の心理学に関する部分に見出すことができる⁽¹²⁾。ユングがそれらの伝統的な区分を用いたのは、いわば古い衣を着て新しいことを述べるためであった。前批判期のカントが、クリスチャン・ヴォルフのテキストを用いて講壇哲学の学問区分に準じて自らの哲学を講じたとすれば、ユングは、合理心理学と経験心理学という古典的な区分を用いて、そこに超心理学や心霊研究の内容を盛り込んでいたのである。

ここであらかじめ、ユングの伝記的な資料を参照するとすれば、彼は一八九五年の第二学期に、美術史家であった友人の父親の書齋に、十七世紀に書かれた降霊術の小冊子を見出して以来、多くの心霊研究の書物を読破したといわれている⁽¹³⁾。その著者の中には、ツェルナーやクルックスのようなツォーフィングア講演の記録にも名前を連ねている多くの心霊研究者がいる。

また、ユングは当時、二つの超心理現象と遭遇している。そのひとつは、ある夏休みに彼が部屋で読書をしていると、ウォー

ルナット材でできた丸いテーブルがピストルの発射音のような爆発音を出して、端から真ん中まで裂けたことであった。彼を含め、家中の者は奇異な感情にとらわれた。ユングの母は、「そうそう、きつと何かを意味しているんだよ。」と、第二人格の声でいった。彼は心の動揺を隠せなかった。また、もうひとつは、ほぼ二週間後に起こった爆発音であった。パンナイフが突然破裂したのであった。母親は、またしても意味ありげな顔をした。後年、ユングは、超心理学者のJ・B・ラインと交流をもったが、ラインの問い合わせに対して、このような事件について報告している。当時、交霊会に参加していたユングは、霊媒をしていた従姉妹がこれらの超心理現象を引き起こしたのではないかと推測している⁽¹⁵⁾。

また、ユングは後年、正確には一九〇九年に、フロイトと予知と超心理学の問題について会話をしている際にも、同じような超常現象に出会っている⁽¹⁶⁾。フロイトの唯物論的な見解に賛成できなかったユングは、自らの横隔膜が灼熱状態になったのを感じた。すると突然、本箱の中で爆発音がしたのであった。それに驚いて、何事が起きたのかわかりかねているフロイトに、ユングはそれが「いわゆる媒体による外在化現象」であると指摘した。フロイトは内心動揺しながら「まったくばかげている」といつて強く否定したが、ユングはきっぱりとフロイトの意見をくつがえして、再度同じ現象が起ることを直感的に予言した。すると、はたして間髪を入れず、まったく同じ爆発音がしたのであった。このことは、二人の関係を分かたず不吉な前兆と

なった。

これらのユングの体験に関して、われわれは何を指摘することができようか。それらの体験は何を意味していたのであろうか。われわれは、それらをいかに評価すべきであろうか。われわれの前提を明らかにしておけば、超心理現象の妥当性や信憑性の問題を直接論じることが、ここでの課題ではない。そこで、その妥当性を括弧に置いて、われわれがある現象が超心理現象であると判断する場合にとまざるさまざまな問題について明らかにしたい。

いわゆる心霊現象や超心理現象において問題になるのは、ある精神的現象と物理的現象との意味なつながり、多くの場合、因果的なつながりである。たとえば、ウォールナットのテーブルの断裂とパンナイフの爆裂の場合、ユング一家には、それらは不可解な現象として受け止められた。それらが超心理現象として捉えられたのは、いうならば、彼が直観的にそれらが霊媒の仕業であると感じたからである。しかし、結局、それは彼の憶測に留まっていた。また、箱の中の爆裂音の場合はどうかといえ、それもまた、彼の直観的な解釈に依存している。つまり、彼にはそれが「媒体による外在化現象」であることが、端的にわかったのである。そのため、ユングは再度それが起こることすら予言できたのであった。いずれにしても、ここで問題になるのは、端的な物理現象の特異な解釈である。ここでは、物理現象は、精神的な存在の物理的な表現として解釈されているわけである。

もし、超心理学や心霊現象に対して親和性のある心性というものが存在するとすれば、それはある特定の物理的現象に対して精神的かつ人間的な意味を付与する傾向であるということができよう。それには一種の擬人的な世界観の要素が含まれている。つまり、それは、われわれの世界は——それが体験されているかぎりにおいて——精神的な意味や人間的な意味をもっており、われわれに何か訴えかけているという信念なのである。それらの体験に対するユングの解釈を見るかぎり、彼には確かに、このような傾向があったように思われる。

ここで問題となるのは、客観的な物理的世界そのもの——それ自体は精神世界の反映でしかないところから始め考えられているであろうが——に精神的なものの外在化現象を求めるのか、それとも、有意味性の文脈を、とりあえず個人の体験の世界の枠内に限定するのかわかることである。たとえば、ウォールナットのテーブルが大きな音をたてて割れたのは、霊媒が精神的な力を発揮したからなのか、それとも、その現象をきっかけにして、ユングが霊媒の影響力を意識しだしたのかといったことが、問題となるのである。当時のユングは、意味体験の客観的な実在性を信じていたという意味で、「唯心論」的な傾向を多分にもつていたように思われる。

それでは、ここで、「心理学に関する若干の考察」の内容を具体的に検討して、彼が唯心論的な思想傾向をもっていたことを裏付けてみよう。まず、総括的に述べれば、彼は、いわゆる科学的唯物論に対して批判的な立場をとっていた。彼の考えで

は、魂は実在し、それは生命原理であり、空間と時間から独立した知性である。そのような彼の信念が、以下において、さまざまな心靈現象の実例によって例証されていくのである。

まず第一に、合理心理学の章において、ユングは生命原理としての魂について論じる。¹⁷彼の考えでは、われわれは生命現象の根底に、物質の原理とは異なった生命原理を認めなければならぬ。それに対して、唯物論者は、すべてを物質によって説明する際に、本来説明すべき生命をあらかじめ前提とするという矛盾をおかしている。彼は生命体の部分的な構成物質を超えた生命原理を認めることによって、生氣論的な考え方を擁護する。ここでいう生氣論とは、機械論が生命体と無生物体との本質的な区別を否定するのに対して、生命体の全体性を重視して、生命体のさまざまな部分的要素に、あらかじめ無機的な原理以上のものがはたらいっていると考える立場である。

そのことを裏づけるために、ユングは以下のような問いを提出する。有機体は新陳代謝を繰り返し、われわれ人間の細胞組織も七年ごとに新しいものと入れ替わるのにもかかわらず、われわれの人格はなぜ、その同一性を保持しつづけているのであろうか。その理由は、人間の肉体とは独立して生命原理が存在していることにある。彼によれば、この生命原理とは、古代の自然学者たちが生命力と述べたものとは同じである。そして、この生命原理は、意識の及ばない身体の植物的な諸機能をも維持しているので、意識現象を超えたものであるといえる。われわれの意識現象は脳の諸機能に依存しているが、脳の諸機能は

ひるがえって生命原理に依存しているのであるから、生命原理が実体であるとすれば、意識現象は偶発的な現象であるといえる。いうならば、意識は、超越論的な原理であり本来的な主体である生命原理の客体となっているのである。生命原理は、われわれの動物的諸機能と植物的諸機能とを包括している。ユングはこの超越論的な主体に魂の *soul* の名を与えている。

それでは、魂とは何であると考えられるのか。ユングの定義では、魂とは「空間と時間から独立した知性 *intelligence independent of space and time*」である。まず第一に、魂はなぜ知性なのか。知性の基準は、その行為の目的性にある。ところで、身体としてのわれわれは、否定しようのない高度の目的性をもっている。そのため、われわれは魂が知性であると仮定することができる。第二に、魂はなぜ空間と時間から独立していると考えられるのか。魂に関しては、感性的な表象が与えられないために、いかなる判断もなされえない。ところで——彼の考えでは——判断されえないあらゆるものは、空間と時間との枠外に存在する。したがって、魂もまた、空間と時間の枠外にあり、空間と時間から独立していると考えられる。このようなことから、ユングは魂の不滅を推定する。

次に、ユングの考えている経験心理学について論じられなければならない。¹⁸これは、いわゆる現代的な意味での経験科学的な心理学ではなく、心靈研究や超心理学を意味している。彼は心靈主義者（唯心論者）の側にたつて、素朴的な唯物論者を批判する。彼らこそは、心靈現象の事実を目をつむる俗物なので

ある。それに対して、経験心理学は合理心理学の理論を心靈現象の事実やそれを証する書類によつて証拠だてなければならぬ。こうして、彼は魂の實在を証する事実を列挙する。

まず、魂が知性的なものであるということについての証明が問題となる。知性的なものは目的性をもっているので、魂が目的的な活動をし目的に応じた組織力を發揮することは、そのことの証明となる。後者の組織的な活動は、心靈物化現象に現われる。まず、肉体としての形態を身にまといっている人間存在自体が心靈物化であると、ユングは主張する。また、彼はさまざまな心靈研究の文献を挙げて、心靈物化現象が写真にとられた事例や、霊媒を通じて人間の手が心靈物化した事例や、覆いをされた煤のついた紙に手形や足形がつけられた事例などを列挙する。こうして、彼は人間の知性の働きが、物理現象となって顯現することをもって、魂の知性の証とする。

次に、魂が空間と時間から独立していることが問題となる。ユングによれば、われわれの概念のカテゴリーを超えているもの、つまり空間と時間を超えているものはすべて超越的である。そのようなものは、感性的には与えられないので不可知なものであり、われわれには把握できない。ところで、万有引力は感性的には与えられない。したがって、それは時間と空間から独立した超越的なものである。それは遠隔作用 *action at a distance* であり、超越的原理が直接顯現したものということが出来る。

そしてまた、重力は純粹に超越的である。ここで、重力にお

いて空間と時間からの解放が成立するのは、以下のような場合である。まず、エネルギーの保存の法則とある事実が一致しないということ、また、ある物体がそれが存在している場所以外に影響を与えないということ、そして、重力がその展開のために時間を要しないために、絶対的に恒常的であるということによつてである。このことが、遠隔作用の特徴である。

ところで、ユングの考えでは、魂が空間と時間から独立しているとするならば、魂は遠隔作用を及ぼす基本的な力として現われるのでなければならない。こうして、魂は万有引力や重力と類比的な力をもったものとして考えられる。魂の遠隔作用は、空間のレベルと時間のレベルの両者において考えられる。まず、空間における遠隔作用は、テレキネシス（精神遠隔操作）現象とテレパシー（精神感應）現象であり、前者の代表例は、催眠術とドッペルゲンガー（二重身、生き霊）と虫の知らせなどであり、後者の代表例は、千里眼（透視）である。次に、時間における遠隔作用は、予感、予言、靈感、厳密な意味での透視、予言的な夢などである。

こうして、ユングが、魂の實在を信じ、魂が空間と時間から独立した知性であることを確信しており、それを証明する事実として、さまざまな心靈現象を考慮に入れていたことが、この講演から明らかになる。ここでの彼の議論は、基本的には、精神的現実と物理的現実との力学的な媒介にあったといえる。つまり、魂が實在するとして、それがいかなる物理的影響力を行使しうるかが問題になるのである。したがって、魂は時間と空

間から独立した知性であるだけでなく、一個の力であると考えられなければならない。そして、精神的な現実とは、特異な物理的現象、つまり、超心理現象を通じて、あらわになると考えられるのである。

Ⅲ 結語

学生時代のユングは、心霊現象に対して積極的な評価を下して、魂の存在を信じ、魂の現実が物理的な現実となつて現われることに注目していた。彼は、心霊現象のような非日常的な現実もまた、日常的な現実とともに現実として認定し、両者を包括するような世界像を希求したのであった。

このような統一的な世界像をもとめる意志こそが、彼の生涯を貫いていたといえるであろう。晩年の著作において、彼は含蓄のある以下のことを述べている。「ありそうにないことが生じることもあり、また、ありそうにないことが占める場所があつてはじめて、われわれの世界像は、現実に対応するものとなる。」²⁰すなわち、ユングが考えている現実とは多様であり、超心理現象や心霊現象などの超常現象をも包括したものであった。また、現実とは、物理的現象につきるものではなく、精神的現象をも含んだものであった。事実、このような多様な現実をいかに統一的に捉えるかということが、彼の一生の問題となつたのである。

しかしながら、ユングはこのような心霊主義者の態度を博

士論文執筆以降明らかにすることはなかった。彼は「心の現象学」へと向い、実在的なレベルではなく、現象学的なレベルで心について論じるようになったからである。ここには、研究態度の大きな転回が認められる。この転回の問題については、また改めて論じられなければならない。

注

- (1) Aniela Jaffe, hrsg., *C.G. Jung: Erinnerungen, Träume, Gedanken* (Olten: Walter, 1987), pp.404f. 以下において、*C.G. Jung: E.T.G.*と略記する。
- (2) Jaffe, op. cit., pp.242ff.
- (3) William McGuire and R.F.C. Hull, eds., *C.G. Jung Speaking: Interviews and Encounters* (London: Pan Books, 1980), p.383. 拙論「現代における信と知の問題——ブーバーのユング批判をめぐって」『比較思想の途』第四号 筑波大学比較思想コロキウム 一九八五 一一八ページ参照。
- (4) W. McGuire and R.F.C. Hull, eds., op. cit., p.248.
- (5) Jaffe, op. cit., pp.42ff.
- (6) Cf. C.G. Jung, (1917/26/43) *Über die Psychologie des Unbewussten*, in *Zwei Schriften über die Analytische Psychologie* (Olten: Walter, 1974), p.103 (GW7:151).
- シヨーペンハウアーは、以下のように述べている。「……この点「客観と表象の関係」について、この独断論と懷疑論

の両方に対して次のように教えてやる必要があるであろう。まず第一に、客観と表象は同じものであること、第二に、直観的な客観という存在は、ほかでもない、その働きにはかならないということ、まさしく働きの Wirken のうちに事物の現実性 Wirklichkeit があるのだということ、第三に「内引用者」ショーペンハウアー著「意志と表象としての世界」西尾幹二訳『世界の名著 続10 ショーペンハウアー』中央公論社 一九七五 一二八ページ以下。拙論「C・G・ユングの『心理学』の基本特徴について——元型の解釈学の基礎研究」『筑波大学哲学・思想論叢』第二号 一九八四 62ページ以下参照。

(7) Jaffe A., op. cit., p.50.

(8) Stefanie Zumbstein—Preiswerk, C.G. Jung's Medium: Die Geschichte der Helly Preiswerk (München, 1975). 筆者は本書を入手できなかったため、本書に関する筆者の知識は、まったく以下に挙げる種村季弘氏の論文に負っている。種村季弘「影の女ヘレーネ——C・G・ユングの霊媒」『現代思想』四月臨時増刊号 第七巻第五号 一九七九 六二—七五ページ。

(9) Marie-Luise von Franz, "Introduction," in C.G. Jung, *Zofingia Lectures, Collected Works of C.G. Jung, Supplemental Volume A* (Princeton: Princeton U.P., 1983), p.xv. ドイツ語版は、現時点ではまだ出版されていない模様である。以下「(CWA)」と表記するものとする。

(10) Ibid., p.xix.

(11) Jung, *Zofingia Lectures*, pp.23-47.

(12) カール・ベリリッソ編「カントの形而上学講義」甲斐実道・斎藤義一訳 三修社 一九七九 一二五ページ以下。

(13) Jaffe, hrg. C.G. Jung, *E.T.G.*, pp.105f.

(14) Ibid., pp.111f.

(15) Letter to J.B. Rhine, 27 November 1934, Gerhard Adler, ed., *C.G. Jung: Letters*, vol.1, (Princeton: Princeton U.P., 1973), pp.180f. (original in English). また、湯浅泰雄著『共時性とは何か』山王出版 一九八七 二十ページ以下参照。

(16) Jaffe, *ibid.*, pp.159f.

(17) Jung, op. cit., pp.28ff (CWA:83ff).

(18) Ibid., pp.33ff (CWA:100ff).

(19) Ibid., pp.39f (CWA:120ff).

(20) Jung, "Ein moderner Mythos: Von Dingen, die am Himmel gesehen werden," in *Zurichschon im Ubergang* (Olten: Walter, 1974), p.429 (GW10:744).

(わたなべ・まなぶ 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)